

前項で、本研究が契沖を「思想史」と「解釈学」の二面から見ていくといった趣旨のことを述べましたが、ここでは、わたしたちの研究が考えている「思想史」の概念について概括的な説明を提示したいと思います。

改めて言えば、わたしたちは、契沖の研究を通じて思想史の方法をうちだすこと、あるいは、確立することを目指しています。

ここで言う「思想史」とは、単に思想を年代順に並べただけのものではありません。では「思想史」とはいかなるものでしょうか。

このことの解明への導きの糸は次のことです。

すなわち、新たな知の創造は、往々にして従来への学知への「批判」として提出されるということです。たとえば、カントの『純粋理性批判』が従来の形而上学の批判であり、マルクスの経済学に関する仕事が経済学批判から産み出されたということであり、フロイトの精神分析が心理学批判であり、といったことです。同様なことがニーチェの哲学やソシュールの言語学についても言い得るでしょう。

要するに、新たな時代を拓く学知は、みずからの革新性を自覚して出発するのです。

ある時代から次の時代への転換をもたらすような知の営みは、同時代の知を総体として批判するような自覚的な場所に立つわけです。近代的な学問体系は基本的に個の「創造」という契機をほとんど認めませんから、「創造」は事後的にのみ確認されるといった立場を墨守し、個の歴史への参加という契機を軽く見る傾向があるだけに、改めて18世紀から19世紀のヨーロッパにおいて進行したパラダイム・チェンジにおける学問批判ということを確認し、「創造」の自覚性という契機を見ておくことが極めて重要です。

改めて言えば、ある思想家が知的な転換点に立っているということは、それ自体すでに思想的な展望をもっているということを意味します。あるいは、思想史上の転換が見えるような場所に立ってはじめて、思想家は自らに構築されていく新たな知の輪郭を見ることが可能になるのです。

このように見ると、「思想史」とは、事後的に把握される物であるとは限らないわけです。というのも、思想に限らず、新たな創造がなされる場合、それをなす者の立つ場所は必ず歴史的な場所になるからなのです。新たな物の創造は、既往の歴史を受けとめた者にしか可能にならないのです。新たな創造は、過去を受容し、これを破壊し、再構築することを通じてなされます。前衛は常に伝統との対決において創造的であり得るわけです。

もちろん、一つの連続する文化にあっては、「歴史」が、つねに、また、すでに、作動しています。わたしたちは気づくと気づかぬとによらず、与えられた「歴史」のなかに自らを住まわせています。わたしたちが現在用いている言語も長い年月をかけて形成されてきた文化的な堆積物の一つです。

そういう「歴史」を連続性という側面から振り返って千年以前を見る、二千年以前を振り返る、そういう意味での「歴史」というものが考えられます。

また、そこに事後的に過去を見るという視点の可能性もあります。

また、近代科学は、その基本的なパラダイムにおいて、対象と観察者の分離ということを絶対条件としますから、事後的な歴史こそが客観的な学問領域として尊重されがちです。

しかし、この、観察者を対象から切り離して成り立つような観察や考察というものの虚構性ということは、近代確立期の日本の識者、夏目漱石、西田幾多郎、折口信夫らによって痛切に批判されていることでもあるのですⁱ。「客観性」もまた一つの「虚構」にほかならないのです。彼らのこの問題意識は今日なお現実的な意義をもっていると言えるでしょう。

ところが、ここで、わたしたちが考えている「思想史」とは、過去を現在化する (actualize) ような「歴史」のことだということができます。

それは千年以前を単に事後的に考察するのではなく、千年以前における事象の、その時点における現在性において見ようとする学問上のあらゆる試みです。

この試みは、今行われつつある革新的な出来事の歴史的な意義を捉えようとする場合にはとりわけ必要であり、かつ、有効なものとなります。なぜなら、それこそが現在進行形の「創造」の革新性を明らかにするための歴史的地平だからなのであり、事後的な視点だけからでは決して明らかにならない歴史的位相だからなのです。

さて、このような歴史地平はどのようにして開かれるのでしょうか。

この点でわたしたちが特に改めて繰り返し主張しておきたいのは、次のことです。

つまり、新たな知的創造を行ってきた人びとは、思想史上の転換が見えるような場所に自ら立つのだということであり、同時代の知を総体として批判するような言説とともに自らの思考を展開するのだということです。(この点、上述の漱石、西田、折口によって近代の確立期に近代批判がなされていることなどはその鮮やかな該当例だと言えるでしょうし、同時に、きわめて早熟な事態だったと言えるでしょう。)

たとえば宣長は契沖の強い影響下に学問を始めたわけですが(このことは重要なので別稿で整理します)、しかし、宣長の契沖に対する認識においてもっとも注目すべき点は、彼が注目したのが契沖の古典解釈の方法の歴史的革新性それ自体であったということです(『排蘆小船』(あしわけをふね))。

宣長は最初から契沖を歴史的な地平において評価しているのです。しかも、この時宣長はまだ二十代の無名の書生であり、医術の習得のために京都に留学していたのであって、誰彼から教えられてそう記したということではないわけです。

ところで、この『排蘆小船』という本は、大正五年(1916年)に佐佐木信綱が伊勢松坂にて本居清造から見せてもらって初めて世に出たもので、それまでは文字通り「学界未知の書」でありましたⁱⁱ。だからこそ小林秀雄は「この覚書き風の稿本は、篋底に秘められた。」ⁱⁱⁱと書いたわけです。

また、小林は、「宣長の学問上の開眼が、契沖の仕事によつて得られた事は、既に書いた。繰返さないが、契沖の『大明眼』を語る宣長の言葉は、すべて『あしわけ小舟』からの引用であつた事を、こゝで思ひ出して欲しい。」^{iv}とも書いています。

もちろん、他者の「大明眼」を言うには、おのれ自身の「眼」も幾分なりとも明いている必要があるわけですが、その「眼」とはまさに「歴史」において自己のなすべき仕事を見る眼だと言えるでしょう。

宣長という人は、自己の開眼をあからさまに誇るようなことは一切せずに、これを「篋底に秘め」たわけですが。これは歴史上の系譜的關係性の継承ということについて多くを物語ることがらといえるでしょう。

宣長の『古事記伝』の後、百五十年ほど経ってから昭和の大注釈『万葉集注釈』全二十巻が澤瀉久孝によって著わされます。『万葉集』の歌の具体的な解釈について細かく一首一首検討していくと、契沖以後では、この澤瀉『注釈』においてなされた解釈上の更新が際立っています。澤瀉『注釈』もまた新たな画期をもたらした仕事なのですが、その澤瀉が実は契沖の革新性をきわめて重視しているのです。澤瀉は京都大学において数多くの俊秀を育てた偉大な教師でもありましたが、実は、その師については語るところがほとんどありません。彼もまた自ら革新的な地歩を築いた人だったようです。

宣長と澤瀉に共通しているのは、彼らが旧来及び同時代の思想から身を引き離し、自らの立脚点を確立しようとする際に、その先駆者を発見することから仕事を始めているということです。このことが意味するのは次のことです。

つまり、彼らは、同時代の知を批判しつつ超越していくわけですが、その際、同じようなことを行った過去の先賢に範を仰いでいるということなのです。

言い換えれば、契沖における「創造」の歴史的な意味というものは、同じような「創造」の壁を打ち破ろうとした宣長や澤瀉によって初めて開示されたということになるでしょう。

このように、歴史というものの内部には、その出来事の意味を明らかにするような特定の場所というものがあるのであり、上の宣長や澤瀉はそういう場所に立ったからこそ契沖という対象の歴史的な意義が格別なものとして認識され得たわけです。

つまり、同時代的創造の意味の歴史的意味は、系譜的に相照応する関係性においてもっとも明らかに照らされるのです。

わたしたちの研究が着眼する「思想史」は、まさにこの系譜的關係性に注目します。それは、知の変革者において開ける場所であり、それは系譜的に継承されていくものなのです。

では、契沖や宣長に対してわたしたちは、どのような場所に立っているのでしょうか。あるいは、立つべきなのでしょうか。

また、江戸という時代は、わたしたちの立つ現代から見てどのような見え方をしているのでしょうか。

ここでやはり念頭に置くべきなのは、「日本」という国家が、明治維新を通じて成立した後の時代にわたしたちが立っているという歴史的な認識でしょう。「日本」は、強力な西欧化の裏面で固有の文化と学知を捨てながら「近代」を可能にしましたが、それは漱石が言ったように「外発的の開化」であり、「内発的の開化」をないがしろにすることを意味しました（「現代日本の開化」）。

ところが「思想史」とは、まさに、「内発的の開化」の重要な一環をなすものなのですから、わたしたちは明治維新後の強力な「外発的の開化」によってもたらされた知的断絶を修復し、認識論的な系譜をまさに現在化することを求められているのです。わかりやすく言えば、近代以降、澤瀉久孝や小林秀

雄がやろうとして完遂し得なかったことを継承していくことなのであり、それは江戸において達成されたところの新たな認識の方法の意義について再発見することだと思います。

江戸期の思想を再検討し、その正当な評価を与えることは、この不連続の連続としての「思想史」あるいは「内発的の開化」というつねにすでに歴史的に作動しているものに目を向けるための最初の目途になるでしょう。

2017年2月17日 研究代表者 西澤 一光

ⁱ 西澤一光、「百年前の青春と煩悶——夏目漱石・西田幾多郎・折口信夫をめぐる」、波濤短歌会会誌『波濤』、2008年11月号参照のこと。

ⁱⁱ 佐佐木信綱、『賀茂真淵と本居宣長』、1935年、湯川弘文社、225ページ以下参照。

ⁱⁱⁱ 小林秀雄、『本居宣長』、1977年、新潮社、120ページ参照。

^{iv} 同前、122ページ参照。

^v この点、鉄野昌弘東大教授の御教示によりました。